

DIPEX-Japan（認定NPO法人健康と病いの語り）セミナー

「健康と病の語り」データベースの利用に基づく
個人のケイパビリティの特定と測定

2025年2月8日

後藤玲子

帝京大学経済学部・先端総合研究機構



【チーム紹介】

DIPEX-Japanのデータシェアリングサービスの活用申請「研究計画書」

1. 研究名：「健康と病の語り」データベースの利用に基づく個人のケイパビリティの特定と測定
2. 研究代表者：後藤玲子（帝京大学経済学部・先端総合研究機構兼任教授）
→キーワード：「出入りするケイパビリティ」「尊厳へのケイパビリティ」関連，慢性疼痛当事者
3. 研究協力者：
 - 金澤真実（帝京大学経済学部客員研究員）→
 - 蔡 薰婕（帝京大学 高等教育開発センター講師）→
 - 稲原美苗（神戸大学人間発達環境学研究科准教授）
 - 日笠晴香（岡山大学学術研究院ヘルスシステム統合科学学域講師）→
 - 酒井美和（帝京大学社会学部講師）→
 - 瀧川裕貴（東京大学大学院人文社会系研究科准教授）→
 - 保田幸子（東京大学大学院人文社会系研究科特任研究員）→
 - 神林 龍（武蔵大学経済学部教授）→
 - 後藤 隆（日本社会事業大学名誉教授）→

各人の問題関心と分析の視角・キーワードは実に多様です。

本報告の目的と期待

- 目的：（タイトル後半）「個人のケイパビリティの特定と測定」－アマルティア・センの「ケイパビリティ・アプローチ」基本枠組とその展開，（時間があれば）研究例について紹介します。

（研究計画書）「本研究の目的は，個人の「ケイパビリティ（潜在能力）」の特定と測定を通して，自由を制約された個人やグループへの社会的支援のあり方を再考することにある」。

期待：（タイトル前半）「健康と病いの語り」データベースの利用，に向けてなにがしかの心構えをもつことができれば幸甚です。

本報告の構成：

アマルティア・センの「ケイパビリティ・アプローチ」基本枠組

1. 新古典派経済学の構図
2. 参考：新古典派経済学の常識的規範
3. アマルティア・センの挑戦：ケイパビリティ・アプローチの提唱
4. ケイパビリティ・アプローチの構図
5. ケイパビリティ・アプローチの背景哲学：「自由の平等」規範
6. ケイパビリティ・アプローチの展開（1つの試み）
7. 「自由は平等」規範
8. 補足と注記

参考：（1）ケイパビリティ・アプローチの実用化に向けた研究（例）
（2）医療・看護との協同可能性について

新古典派経済学の構図

格差の可視化

機会集合：選択可能な財バンドル
【制約条件】
・ 資源（財・所得・富・時間・人・場所など）
・ 市場価格（貨幣）

選択：
ある財バンドル

不平等の不可視化

結果：
効用（快・満足・幸福）
個人間比較不可能

合理的な個人：結果から遡って、自分の制約条件下で、自分にとって最適な財バンドルを選んでいるはず（→均衡点では効率性と自由の形式的な平等が成立している）

難点：資源格差が統計的に認められたとしても、それをもってただちに不平等だとは告発できない。資源格差をどこまでは正することが正当なのか、社会的再分配の目標値を示すこともできない。

参考：新古典派経済学の常識的規範

- どの個人も自己の制約条件下で自己の選好に照らして最適点を選ぶのだとしたら、そして、どの個人も選んだ点から動こうとはしない（つまりは均衡している）としたら、社会があえて個人の制約条件上の違いに立ち入る必要はどこにあるだろう。
- 個人が選ぶことのできる最適点がそこそこ善いとしたら、たとえそれを除くすべての選択肢が悲惨だとしてもかまわない。機会集合（選択可能・代替可能な選択肢の集合）のあり方について配慮する必要はない。
- 社会の構成原理：（選択肢集合を確率的に解釈するとしたら）事前確率の平等と狭義の選択の自由（外的に妨げられない、最適点の有無）があれば十分。

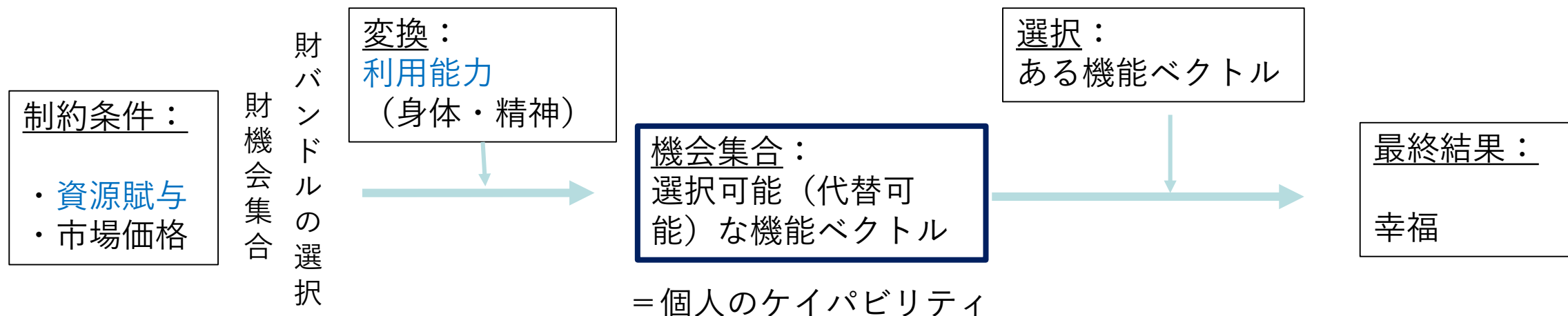
アマルティア・センの挑戦： ケイパビリティ・アプローチの提唱

- 資源の社会的再分配の目標値を明確に定め、確実に実行するためには新たな指標が必要（「何の平等か？」 Sen, 1980）。
- 従来 of 指標には次の難点もあった
効用指標→「適応的選好」の影響を除去できない。
資源指標→資源を個人の利用能力（身体的・精神的）で変換した結果、何が実現されたか、を取り込めない。

【新たな指標】

- ケイパビリティ指標：資源を本人の利用能力で変換して実現される行いや在りよう（＝諸機能）の機会集合を捉える。

ケイパビリティ・アプローチの構図



個人のケイパビリティ：評価する理由のあるさまざまな生き方（different ways of living they can have reason to value）を選択する自由(Sen, 2017, 357)を表す。

何の不平等がなぜ問題か？

社会的再分配の目標は？

すべての個人に
基本的ケイパビリティの保障を！

資源補填・所得保障

利用能力支援

ケイパビリティ・アプローチの背景哲学

【経済学的思考：新古典派経済学と共有】

- 複数の善（価値）の間の代替可能性に着目する点.
- 「選択の自由」の尊重：一定の制約条件下で、実現可能となる選択肢の集合（「機会集合」）から、本人にとっての最適点を選ぶ、と想定する点.

【改変点】

- 「機会集合」のあり方への関心：
- それしか善い生がないからそれを選ぶのだとしたら、彼は自由だと言えますか？
どちらも（もっというと、どれも）善い生ではあるけれど、自分はこれを選ぶ、
となってはじめて自由だと言えるのではありませんか.

つづき：「自由の平等」規範

- 「資源と効用」の間の「本人の利用能力・本人の諸機能」に光を当てる：
諸財の機会集合は個人に外在するもの。それに対して、諸機能の機会集合は、本人の生そのもの。
- 結論：センのケイパビリティ・アプローチは「個人の自由」と「個人間の平等」という近代リベラリズムの2つの理念について、それぞれの内実を豊かにしたうえで、両者を結合した→「自由の平等」規範の形成に寄与

ケイパビリティ・アプローチの展開（1つの試み）

- 実のところ，本人の諸機能の機会集合（ケイパビリティ）は，個人が属するさまざまなグループの重なりでもある．→セン理論の展開可能性あり．
- 個人が自己のケイパビリティを認識することは，資源あるいは利用能力（の可能性）において同様な他の人に関心をもつことと密接に関連する．
- なぜなら，個人は実際には，ある機能ベクトルしか選択できない．いったいどうやったら，実際には選択しなかった，けれども自分が選択できたはずの機能ベクトルを認識することができるのだろうか？

つづき：個人とグループ

- おそらく、資源あるいは利用能力（の可能性）において同様な人々が「現に実現している機能ベクトル」を想像することによるのではないか。
- いま、「資源あるいは利用能力（の可能性）において同様な人々」:= グループとすると、次の図式が成り立つ。

【図式】

- 個人のケイパビリティ = 「グループ」に属する個々人が現に実現している機能ベクトルの集積
- ある機能ベクトルを実現している人々 = 機能への評価が共通する「あるタイプ」

自由は平等？

【グループ・アイデンティティの可能性】

- 自己のケイパビリティへの関心⇒ケイパビリティは同様にタイプの異なる（同一タイプで達成水準の異なる）人々への関心，へと拡張する可能性，すなわち，
- 自分の選んだ最適点以外の選択肢の善さへの関心⇒自分の選んだ最適点以外の選択肢を実際に選んでいる他の人々への関心，へと拡張する可能性がここにある。
- →自由と平等の内在的関係性を示唆する。
（個人が「評価する理由のあるさまざまな生き方」をそこそこ善いものとする、とは、他の人々が「実際に達成しているさまざまな生」をそこそこ善いものとすることを意味する）。

（注記）現実には，しばしば矢印は逆向き．当事者運動への参加を通して，自己のケイパビリティを認識する．

注記

- 研究とのアナロジー：個人のケイパビリティそれ自体は観測不可能．グループメンバーの実際の機能値を一定の統計的・規範的方法で集積することにより，個人のケイパビリティを構成する．（参考）「出入りするケイパビリティ」（Gotoh and Kambayashi, 2024など）
- 異なるグループ間の関係は？→定義より，異なるグループは，互いに比較不可能な異なるケイパビリティをもつ．いわゆる「他者」問題として（事実として，ではなく）「規範としての平等」を要請する．→今回は省略．

ケイパビリティ・アプローチの実用化に向けた研究（例）

- 一橋大学経済研究所2020年1月（第1回）から2024年3月（第13回）まで継続「A市ケイパビリティパネル調査」（一般高齢者・要介護・障害者対象）。
- 目的：外と内を自由に出入りするケイパビリティを，どのような人々が，どのように制約されているか，を明らかにし，
- 広義の「交通（コミュニケーション含む）困難者」，「外出困難者」，「在宅困難者」政策の必要性和有効性を明らかにすること。

参照: 利用能力リスト

環境	段差がきつかった（階段、車の乗り降り、しきいなど）
	設備が利用しづらかった（扉、エレベーター、トイレ、エアコンなど）
	手荷物や器具が運びづらかった
	おいしく食事をとったり、ひと息入れづらかった
対人	ちょっとした 会話 がしづらかった
	大事な案内や 説明 がわかりづらかった
	人の まなざし や態度、言葉づかいが気にかかった
	まわりの人の理解や 手助け を受けづらかった
個体	急な疲れや 痛み がでて、少しあわてた
	予定外の 出費 をしてしまった
	予定外の 時間 をつかってしまった
	自分の こころ やからだの調整がむずかしかった

機能リスト

安心	おおむね 安心 してくつろいでいられた
得	金銭 などの負担が大きすぎなかった
	外出で したかったこと がそこそこ実現できた
	身体・精神などの 健康に良い 感じがした
	自分で コントロール している感覚を保てた
交流・喜び	経験や視野を広げる適度な 刺激 があった
	予期せぬ 出会い や発見があった（人・景色・飾りなど）
	気晴らしができた・ 楽しんだ ・笑った
	周囲の人と会話や 交流 ができた
自分らしさ	ふだんの 自分らしい 感じでいられた

外出/在宅活動に注目するのはなぜか，その両方を調べるのはなぜか？

1) 外出と在宅との双対性（出られないと戻られない）：

「外に出る／家で寛ぐ」

「公共空間に開く／親密空間を保つ」、

「他者と交流する／他者から距離をとる」。

2) 外出/在宅活動の奥行：行動（歩く・乗る、話す）に派生する複数の活動の束。

目的行動：働く、学ぶ、買物する、受診する、食事する、交流する、散歩する。

派生的行動：（地図・天気・設備を）調べる、（付添や車を）手配する、支度する。

基礎的活動：休息、栄養摂取、排泄などの基礎的活動。

参考：ケイパビリティ概念の複層構造： 「グループケイパビリティ」「シティ・ケイパビリティ」など

個人の「外出/在宅」行動がどうして社会的関心事になるのか？

- （Covid19, ガザ地区住民で顕在化）外出行動の剥奪：収容施設（病院・学校）での制約／視覚障害者・重度心身障害者・要支援・要介護者における対環境・対人・対個体バリア／家・教室・会社・地域の「死角」、「閉鎖空間」／公共空間での孤立／社会関係からの孤絶等。

なぜ、市町村自治体を研究対象（franchise）とするのか？

- <出入り自由>問題のフラクタル構造：「家」－市（ポリス）－「国家」－「EU圏」－世界という拡がりにおいて、市（ポリス）は、DV被害から難民受け入れなど、さまざまな社会問題の根底にある「運ぶ、送る、逃がす、圧を抜く」仕組みづくりの結節点にある。

「ある紛争が国家内部の紛争として――内戦として、社会紛争として、家庭内紛争として――枠組にはめられていくほど、人権侵害が起こったと認められる可能性は少なくなります」（マッキンノン, 1998, 116）。だからこそ！

医療・看護との協同可能性について

- これらの諸思想は、それぞれ単独的には統合失調症の理解の決定打となるわけではない。しかし、多様な試みは、総合失調症の概念を補完するうえでそれぞれが欠くことのできない役割を持つようになっている。統合失調症を持つ人が過ごす人生全体を考え、可能な対人援助の全体像を思い描く場合、医学の枠内だけではとても対処できない多様な課題が含まれていることに気づかされるからである。
- （村井俊哉, 2024「統合失調症とはどういうことか」『統合失調症の未来——研究と治療：特集・医学のあゆみ』，医歯薬出版）
- この方法論的スタンス——おそらくは現在の統合失調症研究の到達地点——は、ケイパビリティ・アプローチと驚くほど似ている。

- 以上です.
- 皆様の並々ならぬご尽力により，集積された貴重な語りをデータとして利用させていただくことに深く御礼申し上げます．何かお気づきの点がありましたら，どうぞご遠慮なくご指摘くださいますか．何卒どうぞよろしくお願い致します。